

南西諸島〔沖縄諸島(琉球列島)・薩南諸島〕のスマレ

浜 栄 助

E. Hama: The violets of Southwest Islands, Japan

南は西表島から石垣島・沖縄島・奄美大島・屋久島など南西諸島一円の島々に生育するスマレについては、1800年代末から1900年代初め以来調査がすすめられていたが、途中第二次大戦の混乱にまきこまれ、本州のスマレ同様その究明は完全に途絶えてしまった。

戦後の空白期を経た後、1954年(昭和29年)にいたり、明治以来のスマレが前川文夫先生によって全て纏められ、続いて1963年(昭38)前川文夫・橋本保先生により改めて分類学的に大整理が行われて、ここに今日のスマレ学隆盛の新しい基礎が築かれた。私がスマレ界にタッチし始めた1955年(昭30)はまさにこうしたスマレ学再始動の時であり、両先生の御指導を得ておもしろい全国に足がのびてしまった。

沖縄のスマレ類調査のために、初めて私が沖縄島に赴いたのは1967年(昭42)で、万座毛の海岸断崖にあるオキナワスマレが、本州にはない *Serpentes urajiro* スマレ節である可能性が強いという橋本先生の御指導があったの遠征であった。

以来今日まで南西諸島のスマレは沖縄の中島邦雄氏などの活躍もあいまって原点に戻り調査がつけられてきた。

退職を機に昨年念願の西表島・石垣島・屋久島の調査を実現することができ、漸く一応の概観が把握できたので、南の島々に生息するスマレ群を以下簡単に御紹介したい。

1. リュウキュウシロスマレ *V. betonicifolia* var. *oblongo-sagittata* (Nakai) F. Maekawa et Hashimoto

花柄が長いところから1938年(昭13)に *V. maculicola* Koidzumi の名称で小泉源一が奄美大島のものに命名したのが最初である。1963年(昭38)前川・橋本はこれを、*V. betonicifolia* (オーストラリア産のものが基本で、日本の東北・南満州以南から東南アジア・オーストラリア・ヒマラヤ・アフガニスタンに広く分布)の一地方型であると判断した。

日本の *V. betonicifolia* にはほかに本州〜九州に分布するアリアケスマレ var. *albescens* (Nakai)

F. Maekawa et Hashimotoがある。

リュウキュウシロスマレは西表島から鹿児島県市来まで分布するが、花時の葉が長三角状皮針形のものや、卵状皮針形のものなど変異があり、更に調査が必要である。また南方の基本種である *V. betonicifolia* の生品や、その幾つかの地方型の生品にお目にかかった上で回答をだすべき種類で、目下の所何となく胸に落ちない種類である。

2. リュウキュウコスミレ *V. yedoensis* var. *pseudo-japonica* (Nakai) Hashimoto

最初 Maximowicz, Hemsley, 伊藤篤太郎等により、ツクシコスミレ(現在はコスミレ) *V. japonica* Langsdorff ex Gingins と一緒にとりあつかわれてきたが、1928年(昭3), 中井がリュウキュウコスミレ *V. pseudo-japonica* Nakai とした。

外形がコスミレと良く似ており、沖縄でスマレといえばこれをさすくらい最も普通に見られる。

橋本は距の形その他からノジスマレ *V. yedoensis* Makino の変形としたが、浜もこの説に賛成である。但し数が多いだけに非常に変異がある。

シロバナリュウキュウコスミレ f. *sonoharae* Hama

* 3. タイワンコスミレ *V. stenocentra* Hayata

早田により命名され、従来台湾・琉球にあるとされて以来、現在なお沖縄で確認できないでいる幻のスマレである。また、その本物の生品を見た物がないのでその正体自体が再検討さるべき種類である。橋本は、タイワンコスミレはヒメスマレの広葉型と判断している。ヒメスマレ *V. minor* Makino (*V. mandshurica* subsp. *nagasakiensis* W. Becker) は日本では、市街地や山村及びその周辺にしかなく、また冷涼地には見られない多分に帰化的な感じのするスマレであるが、橋本はこれを、日本〜琉球・台湾・南アジア等に普遍的な *V. confusa* の一群とし、*V. confusa* Champion subsp. *nagasakiensis* (W. Becker) F. Maekawa et Hashimoto と改名した。タイワンコスミレもヒメスマレと同じくその *V. confusa* の一群

であるとしているがいまだに解明できていない。昨年の浜の調査によってもそれらしいものを見出すことができなかった。

4. ヤエヤマスミレ *V. tashiroi* Makino

1907年(明40)に花も実もない標本であったが独特の葉から、早くも新種として記載されたスミレである。1941(昭16)になり、津山尚はフモトスミレに近縁のものと判断した。詳細な原色図は1975年(昭50)の浜のものが最初であるが、その後の調査で、以下5, 6とあわせて本州にない独特の系統のものと判断している。

西表島の河川沿いの薄暗い陰湿地にある。

イリオモテスミレ *f. takushii* Nakajima 葉が心臓形〜広心臓形、西表島・石垣島

イシガキスミレ *var. tairae* Nakajima 葉が三角状、石垣島

5. ヤクシマスミレ *V. iwagawae* Makino

1912年(明45)屋久島のものにもとづいて発表。昨年の調査ではかなりの分布が見られた。奄美大島・徳之島・沖縄島にもいくらかある。

6. アマミスミレ *V. amamiana* Hatusima

1963年(昭38)初島住彦の発表による。奄美大島の河川沿いに生育するもので、スミレの中では最小のものである。

*ヤエヤマスミレ・ヤクシマスミレ・アマミスミレの一群は、溪流スミレ群と称しても良く、小型でふく枝で増え、花期が2〜2.5ヶ月と長いなど、共通した独特の性質を持つ系統のものである。各島々の各河川沿いにはこの仲間属する新しいものが更に見出される可能性がある。

7. オキナワスミレ *V. utchinensis* Koidzumi

沖縄のタチツボスミレ類の研究は、松村任三が整理にあたった、田代安定の琉球植物大コレクションの中に含まれていたものをもって始まりとする。それは1887年(明20)に国頭で採集されたもので、これに松村は *V. sylvestris* *var. grypoceras* Matsumura と命名し、1899年(明32)に発表した。その後1922年(大11)に中井はこの標本をリュウキュウタチツボスミレ *V. lutchuensis* Nakai と改名した。

一方1938年(昭13)になり、小泉源一は金城(天野)鉄郎が1938年に万座毛で採集したものに着目し、これにハイスミレ *V. utcinensis* Koidz. と命名し、タチツボスミレ *V. grypoceras* と異なるウラジロスミレ節 *Serpentes* のものと判断して発表した。しかしハイスミレの和名は、ツクシスミレの

異名のハイスミレと混同するので、1952年(昭27)多和田真淳・天野鉄夫によりオキナワスミレと改められた。京都大学にある type には小泉によりマンザモスミレと記されている。

しかし折角のこの小泉の見解もそのままとなり、中井の *V. lutchuensis* と小泉の *V. utchinensis* はその後、混同して扱われてきた。1959年(昭34)の初島・天野の沖縄植物目録でも、マンザモスミレはリュウキュウタチツボスミレと同一物ならんとされている。

1966年(昭41)になり、井波一雄の京都大学所蔵の type 標本写図がきっかけとなり、橋本の判断で小泉説が浮上した。これをうけた1967年(昭42)の浜による実地調査でウラジロスミレ説が確立された。

葉が厚くて光沢があり、裏面は蒼白色で花は平面的に展開する。花柱上部はバットの先を斜断したような日本のスミレでは見られない形をしている。果実も球形に近く、これらの点が *Serpentes* の特徴である。台湾以南の同類の仲間との比較が必要とされる。

その後の調査の段階で新種も出て、結局南西諸島にはオキナワスミレのほか、8, 9, 10, 11の(1), (2)のような有茎種があることが判明した。

8. ツヤスミレ *V. grypoceras* A. Gray *f. lucida* (Nakai) F. Maekawa

中井がリュウキュウタチツボスミレ *V. lutchuensis* Nakai (1922年)、正宗厳敬が *V. grypoceras* A. Gray *var. lutchuensis* (Nakai) Masamune (1955年・昭30)としたものであるが、これはタチツボスミレの西南日本海岸性の *f.* であるツヤスミレの一型である。単にタチツボスミレとしてもよい。沖縄島では個体数は多くない。長野県で栽培しても温度さえあれば現地並に花期が早い。

9. シマジリスミレ *V. okinawensis* Nakajima et Hama

オキナワスミレ追求の段階で、1969年(昭44)中島が採集し送られて来た生品に浜が着目したもので、これがエゾノタチツボスミレ類 *Campylostylae* に属する新種であることが判明し、中島と共同で上記学名をつけ発表した。花柱上部にエゾノタチツボスミレ類独特の肉質突起があり、側弁が有毛。その他の点はオキナワスミレに似ているので気のつくのが遅れたことと思われる。沖縄島南部の島尻郡にちなんだ名である。なお京都大学に、1938年(昭13)に、平芳久採集の八重瀬産のシマジリスミレがマンザモスミレと誤認されて保存されていることもわか

った。

シマジリスミレは沖縄島南部の低山地にあり、浜は命名して以来、初めて昨年現地が良い個体を観察でき、写真も撮れた。

10. ツクシスミレ *V. diffusa* Ging.

異国情緒豊かなスミレで、この仲間は東南アジアに多い。沖縄島では意外に少なく、数箇所にししか見られず、南方からの帰化品と考えられる様相を示す。

鹿児島県・長崎県でも同様な状況である。

11. 屋久島の矮小スミレ群 (ヤクシマスミレは前述した)

屋久島のスミレには、同島の他の植物と同様、矮小化したものが見られる。今年の調査で念願のその全容が判明した。

(1) ヤクシマタチツボスミレ *V. grypoceras* A. Gray f. *yakusimensis* (Masamune) Sugimoto

屋久島の原生林を抜けた辺から頂上部にかけて生育している小型のタチツボスミレである。原生林中にはタチツボスミレは見あたらず、下って海岸部にはツヤスミレがある。

(2) キバナノコマノツメ *V. biflora* L.

屋久島の山頂部には矮小化したキバナノコマノツメが生育している。茎が短縮されかつ倒伏しており、葉はそれほど長くもない枯草の中にかくれ、花だけ少し突き出して咲いている状態である。ヤクシマキバナノコマノツメと呼びたいように小さい。

(3) コケスミレ *V. verecunda* var. *yaku-shimana* (Nakai) Ohwi

ニョイスミレ (ツボスミレ) の矮小化したもので、原生林上部の湿地帯から頂上付近まで見られる。葉は大きくても1 cm以内で、ミズゴケ類の中のもの、まさにコケの中のコケスミレである。

(4) ヤクシマミヤマスミレ *V. sieboldi* subsp. *boissieuana* var. *pseudo-selkirkii* (Nakai) F. Maekawa et Hashimoto

名称が混乱し易いが、ミヤマスミレ *V. selkirkii* Pursh ex Goldie とは関係なく、ヒメミヤマスミレ *V. sieboldi* subsp. *boissieuana* (Makino) F. Maekawa et Hashimoto の矮小化したもので、屋久島の下部から上部までかなり個体数が多い。下部には九州南部のものと大きさの変わらぬものも混じっており、連続性をにおわせる。

フィリヤクシマミヤマスミレ f. *albi-variegata* Hama も多い。

(5) フモトスミレ *V. sieboldii* Maxim.

原生林上部から山頂まで生育するフモトスミレはこれまた矮小化している。ヤクシマミヤマスミレと形態が良く似ているので、混同されていたのか、今まで注目されていなかった。

フィリフモトスミレ f. *variegata* (Nagasawa) F. Maekawa et Hashimoto も多い。

シラユキフモトスミレ f. *albiflora* Hama 花弁に紫条がなく、全体から色素の抜けた矮小フモトスミレである。

(6) コミヤマスミレ *V. maximowicziana* Makino

これも従来知られていなかったが、やはり矮小化したものが生育していることが判明した。

☆ 南西諸島北部・九州南部を北限または南限とするスミレ

(1) 北限とするスミレの北限地

上甕島・鹿児島県市来：リュウキュウシロスミレ

鹿児島県指宿市：リュウキュウコスミレ

屋久島：ヤクシマスミレ

(2) 南限とするスミレの南限地

霧島山・鹿児島北部：サクラスミレ(吉松)、ホソバシロスミレ(霧島山)、エイザンスミレ(霧島山)、シコクスミレ(高隈山)、シハイスミレ(粟野岳)、キスミレ(霧島山)

鹿児島県中南部：アリアケスミレ(市来)、ヒゴスミレ(揖宿郡大野岳)、ナガバノタチツボスミレ(佐多岬)

屋久島：コスミレ、マルバスミレ、コミヤマスミレ、ニオイタチツボスミレ、アカネスミレ、フモトスミレ、ヒメミヤマスミレ、ノジスミレ

トカラ列島：ヒメスミレ(口之島)、スミレ(宝島)、ニョイスミレ(中之島)

現在までの調査では以上のようなのであるが、更に調べる必要がある。特に北限と南限のスミレが入り乱れる屋久島のスミレ調査は、従来の記録の検討も含めて大きな課題である。

漸くすっきりしてきた南西諸島のスミレ節について概観に触れて見たが、スミレ界にとって新種の発見される可能性が最も多い南の島々だけに、その魅力は計りしれないものがある。